

19世紀パリ時間旅行 —失われた街を求めて—

練馬区立美術館（東京・中村橋） 2017.04.16～06.04

「フランス・パリ」の始まりは、紀元前3世紀に遡って以後少しずつ拡大してヨーロッパや世界を牽引する近代都市として発展してきた街で、長い歴史の中で最も衝撃的な出来事は、「ナポレオン3世」の肝いりで「オスマン男爵」による「パリ大改造」によって、大きな都市の骨格が形成されたことである。

1870年代には、この大手術を経た「パリ」の景観は、印象派を始めとした画家たちの格好の題材の場所となつて数多くの作品が描かれた時代となつてきた。



本展は、フランス文学者「鹿島茂氏」による「失われたパリの復元」（雑誌：『芸術新潮』連載）をベースにして、「パリ」の全体像に迫る企画で、絵画や衣装など多様な美術作品を通して、「パリ」の大改造以前および以後の様子を総覧することができる。

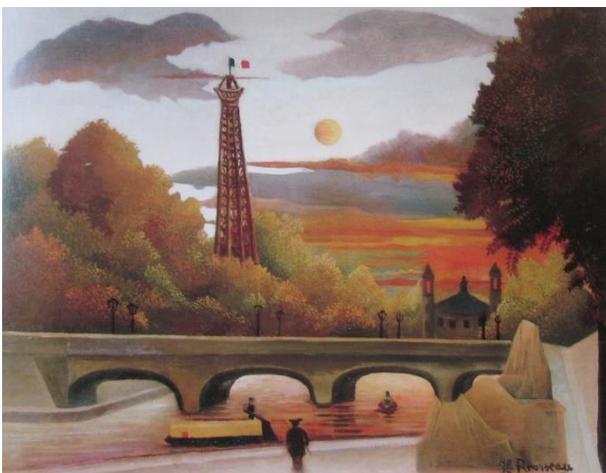
まさに、19世紀の「首都・パリ」という都市と社会、そして美術を見つめる“タイム・トラベル”に出発できる展覧会であると紹介されている。

アドルフ・マルシアル＝ポテモン：《ロラン＝ブラン＝ガージュ通り（袋小路）（部分）写真》

懐かしいパリの路地風景を描写した作品で、かつてのパリの様子を伝えるために、往年の“ノスタルジー”が反映されている「版画作品」である。

参考 「芸術新潮」2017年4月号 112～115頁

アンリ・ルソー：《エッフェル塔とトロカデロ宮殿の眺望》



（1896～98年 油彩/カンヴァス）

箱根・ポーラ美術館 所蔵

作品には、1878年開催の「パリ万国博覧会」の記念碑的建造物である「トロカデロ宮殿」と「エッフェル塔」の遠望が描かれている。

どちらの建物も木立に埋もれているようであるが、実際には周囲には森がなくて、画伯ならではの脚色であり、得意とするグラデーション（濃淡度）の表現であった。